

次の文章を読んで、問いに答えなさい。

北斗^{ほくと}は、中学入学前の春、東京から大阪まで自転車で一日百キロずつ走るといふ冒険を計画する。父昇平^{しやうへい}が自動車で伴走して出発するが、初日はトラブルが続き、翌朝北斗は寝坊する。出発前、前日の疲れが残る北斗に、昇平は日暮れまでに今日のゴールに着けるかを尋ねた。

①ただでさえ二日目のコースはきつめに設定されている。出発してすぐに^{*}ヒルクライムとなり、標高六百二十メートルの熱海峠^{あたみ}が待っているのだ。そこを越えてもしばらくは山岳コースだし、どうにか駿河湾^{するが}まで下つてもその後の距離が長い。そしてゴールが宇津ノ谷^{うつのが}峠^やということは、一日走って疲れ切った最後にもまたヒルクライムが待っているのだ。一日目の疲れが残っている上、寝坊で走れる時間も短くなっていることを思えば、とても完走はできそうにない。一日目のコースを走り抜いた北斗にはそれがよく分かっているはずだった。

②だからだろうか。北斗はじつと下唇を噛^かみしめて、自分から口を開こうとはしない。根比べみたいな沈黙が続いた後、昇平は優しく語りかけた。

「俺^{おれ}たちはどっちも、少し冒険つてもんを甘く見てたんじゃないかな」
北斗が視線を上げた。③昇平の口調にかえって不穏なものを感じたようだ。

「北斗は^{*}宇宙まで走るって目標は果たしたけど、その後の疲れを甘く見てたから寝坊した。それに野宿つてもんを甘く見てたから自転車泥棒にもあつたし、危ない真似^{まね}まですることになった」

北斗が何か言い返そうとする。④昇平はその前に自分の落ち度も認めた。
「父さんがスピード違反やら何やらで遅れたのも、^{*}サポートカーつてもんを甘く見てたからだ。北斗の冒険を認めて手伝おうって思ったくせに、熱海まで走るだけでもこんなに疲れが残るってことを読みきれてなかったのも、考えが甘かったと思うよ」

「……………」

「だからさ、冒険を諦^{あきら}めるんじゃないくて、再チャレンジ^{あきら}ってことにしないか？」

「再チャレンジ？」

「そう。態勢を立て直すんだ。もつとしつかり準備して、絶対走りきれろぞつてくらい鍛えてから、もう一度今回のコースに挑めばいいじゃないか」

「もう一度つて……いつ？」

「そりやあ分かんないけど、ゴールデンウィークとか夏休みとか、いろいろあるだろ。お前が中学に入ってからスケジュール次第だよ」

「そんな時にはまた母さんが反対するかもしれないじゃないか」

「その時には絶対に説得してやる。父さんもサポートカーで失敗しないように練習しとく。だから北斗は、一日目に百キロ走った次の日も平気で早起きしてまた百キロ走れるくらいの体力をつけとくんのだ」

「……いつか再チャレンジするから、今日走るのは諦めろってこと？」
「そうだな。これから出発して東名高速にのれば、夜までには余裕で大阪に着けるぞ」

そのことについて、北斗はしばらく考えていた。そしてぼつりと呟いた。

「……僕は、まだ走れるよ」

「でもお前、筋肉痛がひどいだろ？ 歩くのだって大変そうだったじゃないか。その調子じゃ峠越えだって——」

「それでも、まだ走れる」

「これから走り出しても、日が暮れるまでに宇津ノ谷峠は無理だ。^{*} エックポイントまで辿り着けなかったらリタイアするのは、お前が言い出したんだぞ」

「でも、まだ日は暮れてない」北斗は空を指さした。「だから、たとえリタイアだって、今日は走りたい。行けるとこまで行ってみたい」

「……………」

^⑤ 今度は昇平が黙る番だった。北斗の言葉に、ふっと^{*} 既視感を抱いたのだ。

行けるとこまで行ってみよう。——かつて昇平も、そう思ったことがある。いつのことだったろう。初めて海まで走った時か、喧嘩して家出した時か、実家から上京した時か——自転車で思い切り走る時、頭の片隅にはいつもそんな思いがあった気がする。

北斗がずっと抱いていたのも、実はそんなシンプルな思いだったのか

もしれない。行けるとこまで行ってみようという願望が、北斗の中で冒険という言葉になった。だから冒険の終わりは寝坊の後で昇平から告げられるのではなく、力いっぱい走りきった後でやってこなくてはならないのだろう。

「……分かった。じゃあ今日は走れるだけ走ろう。父さんもしっかり伴走するから」

昇平がうなずくと、北斗もしっかりうなずいた。

「その代わり、約束は約束だ。日が暮れるまでに宇津ノ谷峠の道まで着いてなかったら、リタイアだ。今夜はまた車で寝て、明日大阪まで行く。今回の冒険はおしまいで、^{*} 仲男と美園さんにお祝いを言いにく。それでいいな」

「うん、いいよ」

北斗の中でも何か吹っ切れたようだった。たとえ筋肉痛だって、これから思い切り走ることだろう。それが昇平には頼もしく思えた。

(竹内 真 ^{たけうち まこと} 「自転車冒険記 12歳の助走」による)

*をつけた語句の＜注＞

ヒルクライム——自転車で長い上り坂を登ること。

宇宙まで走る——本作品内で「宇宙までの高さ」とされている百キ

ロメートルと同じ距離を、自転車で走ること。

サポートカー——自転車の乗り手に水や食べ物を渡したり、トラブルに対応したりするための伴走車。

チェックポイント——通過を確認するための地点。ここでは、その日ごとのゴールのこと。

既視感——かつて経験したことがあるように感じられること。

伸男と美園さん——大阪に住んでいる昇平の友人とその妻。この日の早朝に子どもが生まれた。